「未来を拓く教育の創造」（２年次）

１　本研究について

「一人一人が夢をもち　未来を生きる力のある子」という本校の学校教育目標のもと，生涯にわたって自らの未来を切り拓いていける人間に育てていくために，小学校６年間の教育活動を通して子供に資質・能力を育んでいこうとする実践研究が「未来を拓く教育の創造」という研究である。

自らの未来を切り拓いていく時に発揮する資質・能力（生きる力）の源を小学校教育で育成するために，「卒業時までに育成を目指す主な資質・能力」を整理した(資料１)。これは，協働性や社会参画などの非認知能力や，見通す力や比べる力など思考の過程で発揮される資質・能力を，「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の３つの視点で整理したものである。

学校の教育活動全体を通して「卒業時までに育成を目指す主な資質・能力」を育むために，これらの資質・能力を低・中・高学年の発達段階に合わせてさらに整理した整理表（別添資料）を各教科等の実践で活用していく。整理表の資質・能力の活用とは，各教科等の学習過程で子供に整理表の資質・能力を発揮させることを意味している。そうすることで，各教科等の学習過程が豊かになり，各教科等の資質・能力がより育まれることを目指す。そして各教科等の実践を通して見えてきた子供の姿から，整理表の資質・能力や，「卒業時までに育成を目指す主な資質・能力」を見つめ直し，より本校の子供の実態に合ったものになるよう努めていく。令和６年度現在では，整理表では思考力，判断力，表現力等に位置づけられていた「問いを見つける力」を，学びに向かう力，人間性等に位置づけ，継続検討を進めている。これは「問いを見つける」ということを，学びに向かう意欲の向上の視点で捉える方が資質・能力の捉えとしては良いのではないかという継続検討の視点である。このように，年間の研究を通して，適宜整理表の資質・能力や「卒業時までに育成を目指す主な資質・能力」を見つめ直し，検討していく。

以上のような視点で資質・能力育成に向けた実践研究を行い，資質・能力ベースのカリキュラム・マネジメントを充実させ，本校独自のカリキュラム開発を目指す。そうすることで，本校がこれまで大切にしてきた「常に子供に価値判断を置く」ということをより具現化することにつながると捉え，本研究を行っていく。

資料１　Ｒ６年度　卒業時までに育成を目指す主な資質・能力（継続検討）

知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
○個別の知識及び技能を学びながら，既得の知識及び技能と関連づけられ，各教科で取り扱う主要な概念を深く理解し，他の学習や生活の場面でも活用できるような確かな知識及び技能。 ○一人一人が感性などを働かせて様々な事を感じ取りながら考え，自分なりに理解し，表現したり鑑賞したりする喜びにつながる知識及び技能。	○集めた情報を精査し，自分の考えを決めることができる ＜探る力＞ ○複雑な対象に対して視点を明確にしたり，比較・分類したり，概念化することができる ＜決める力・比べる力・分ける力＞ ○目的や対象に応じて，根拠や理由を明確にし，説明したり，感性を働かせたり，表現したりすることができる　＜表現する力＞	○これまでの自分の見方・考え方との違いや学びのつながりから「問い」を見つけようとする　＜問いを見つける力＞ ○学習を振り返り，次の学習へ生かそうとする ＜学びの自覚化＞ ○仲間を認め合い，協力して活動しようとする＜協働性＞ ○身近な人々や社会及び自然等（ひと・もの・こと）に自主的に関わろうとする ＜社会参画＞

２　これまでの研究について

（１）前主題「学びをつなぐ教育の創造」について

前研究主題「学びをつなぐ教育の創造」では，学習に向かう子供の姿を丁寧に見とり，教科の枠を越えた汎用的な資質・能力の視点である整理表の資質・能力から子供の姿を価値づけたり，生活経験や既有知識等とのつながりを大切にして実践を行ったりする研究を行った。その成果として，学習意欲や自己肯定感が高く，仲間と協働して活動するという子供の姿が多く見られるようになってきた。これは，目の前の子供に向き合い，寄り添い，子供を中心に研究を進めてきたことによる成果だと言えるだろう。このような子供の姿が見られるようになったことに加え，各種学力調査でも，子供の非認知能力が全体的に高いということが示されるようになった。しかし一方では，各教科等の資質・能力の視点では個人差が大きいという課題も明らかになってきた。

（２）「未来を拓く教育の創造」１年次の研究について

前主題で明らかになった課題を解決するために，「未来を拓く教育の創造（１年次）」では，これまで見とってきた整理表の資質・能力を，各教科等の学習過程（知識及び技能を活用し課題を解決する過程[1]）で発揮されるものとして捉え直し，各教科等の資質・能力の確かな育成に向けた研究を行った。その成果として，各教科等の学習過程で整理表の資質・能力を発揮させることで，各教科等の資質・能力を育んでいく子供の姿が見られた。以下，音楽科の実践を一例として紹介する。音楽科では，「思いや考えを基に構想し，意味や価値を創造していく過程」（知識及び技能を活用し課題を解決する過程）を教科の学習過程として設定した。授業では，『越天楽今様』という平安時代の音楽の優雅な曲想が，「のびる拍」（日本音楽などに見られる拍）と深く結びついていることに気づき（音楽的な見方・考え方を働かせ），そこから得た自分たちのイメージが伝わるような歌い方を仲間と試しながら（整理表でいう協働性を発揮させながら），自分にとって意味や価値のある歌唱表現を実現させる姿が見られた。他教科部の取り組みは，昨年度の研究集録をご覧頂きたい。

（３）１年次の研究から見えてきたこと

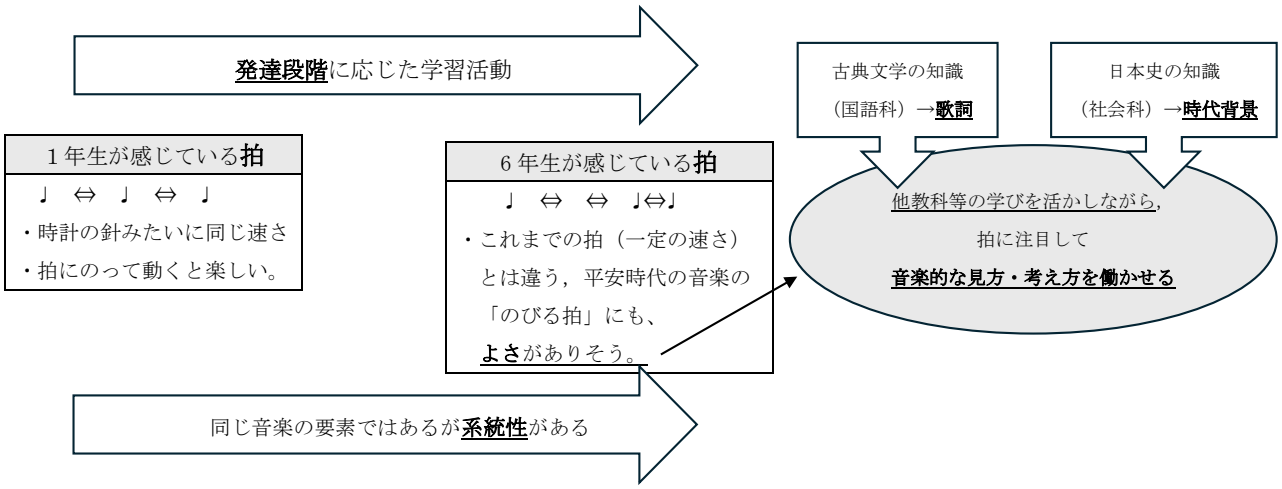
１年次の研究では，先述したように学習過程で整理表の資質・能力を発揮させることを視点に各教科等の学習過程が豊かになるように研究を進めた。では，学習過程を更に豊かにし，子供の資質・能力をより育成していくためには，どのようなことが必要なのだろうか。先述した音楽科の実践では，教材曲と向き合う際，子供は「拍」という音楽の要素に着目していた。しかし，同じ「拍」でも，１学年は「拍は時計の針みたいに同じ速さで，拍にのって動くと楽しい」という視点であるが，６学年では「拍は一定の速さのものだと思ってたけど，一定の速さではない『のびる拍』にもよさがありそう」という視点で教材と向き合う。このように，同じ音楽の要素でも系統性があり，１学年で学んだ「音楽に合わせて手拍子をしたり歩いたりすることができるような，一定の間隔をもって刻まれるもの」[2]という拍の基本的な部分を踏まえて，「間隔に伸び縮みが生じる」[3]拍の学習が可能になる。このように，子供の姿から教科内容における系統性や子供の発達段階に応じた学習活動を組むことの必要性が見えてきた。学習過程をより豊かにするためにも，系統性と発達段階を考慮することが分かったことが，１年次の成果のひとつである。

また，１つの教科の中だけでは納まらない学びの姿も見られた。先述した音楽科の例でも，子供が音楽的な見方・考え方を働かせる際，社会科の日本史の知識や，国語科の古典文学の知識を

活かしている姿が見られた。このような子供の姿から，その教科の学習過程をより豊かにするためには，他教科との関連を意識した単元配列も効果的ではないかということが見えてきた。

１年次の実践の中でも，社会科研究部では４学年の実践において総合的な学習の時間や国語科との関連を図り，子供の学びがより充実したものになる取り組みを行っていた。その取り組みでは，社会科の学習において「地域の伝統文化」「県のまちづくり」の視点で課題を設定し，総合的な学習の時間(探究課題：環境)も活用しながら調べ学習や資料作成に取り組み，まとめる時間は国語科の書くことの活動として取り組んでいた。

この取り組みでは，教科横断的な視点から各教科の単元で育みたい資質・能力を捉え，それぞれを関連づけた指導を行うことで，それぞれの学習過程がより豊かなものになり，それぞれの教科の資質・能力が育まれる姿が見られた。



資料２　子供の姿から見えてきた２年次の研究の視点（音楽科の例）

３　２年次の研究方針について

１年次における研究の視点であった各教科等の学習過程をより豊かなものするために，２年次の研究では，教科内容の系統性や発達段階を意識した実践，そして他教科等との関連を意識した実践を中心に取り組む。このような取り組みを通して，各教科等の系統性や子供の発達段階という「縦」の視点と，各学年における各教科等の相互のつながりや関係性を意識した年間の取り組みという「横」の視点から，資質・能力ベースのカリキュラム・マネジメントを行う。他教科との関連を意識する取り組みでは，それ自体が目的なのではなく，他教科との関連を意識することで，それぞれ教科でどのような資質・能力を育成することができるのかということを大切にしていく。このようなカリキュラム・マネジメントの視点をもって実践をすることで，先述した音楽科や社会科の例のように，生活経験や既習事項，そして他教科等の学びをつなげながら本時の学習を深めていく子供の姿を引き出し，子供の資質・能力をさらに育成することができるのではないかと考えている。

また,カリキュラム･マネジメントの一環として学校全体のカリキュラムを整えていくために，低学年では，幼児教育との円滑な接続を意識し，生活科を中心にした合科的・関連的な実践に取り組む。中・高学年では，総合的な学習の時間の探究課題を整理し，その課題解決を通して資質・能力を育成することと，他教科等で身に付けた資質・能力と相互に関連付け，学習や生活で生かしていけるように実践に取り組む。

生活科や総合的な学習の時間は，他教科等で身に付けた資質・能力を発揮する場面として，整理表の資質・能力の見つめ直していく際にも，重要な役割を担っていると考える。

上記の研究方針を踏まえ，校内の研究体制の見直し，再編成も行った。これまでは教科研究部のみ配置されていたが，それに加えて全担任が配置される「低学年研究部」「中学年研究部」「高学年研究部」を設立した。また生活科と総合的な学習の時間については全学級担任が研究部として実践を行う。

４　研究の足跡

年度初めの校内研究では，これまでの教育実践研究の成果を踏まえつつ，子供たちに資質・能力を確実かつ効率的に育むために，以下のことから取り組んだ。すなわち，全職員で学校教育全体や各教科等で育むべき資質・能力を再確認・再整理するための，単元配列表の整理・作成である。この単元配列表の作成にあたっては，学習内容とのつながりという視点だけではなく，資質・能力の育成という視点から，どのようなつながりや関連性があるか見直した。低学年部では，生活科を通して身の回りの生活から見つけた学習課題を他教科で解決していくような年間カリキュラムのベースが見えてきた。中学年部，高学年部では，総合的な学習の時間で取り組む探究課題等を整理し，他教科での学びをどのように生かしていくかという議論がなされていた。

資料２　校内研究の様子

５月からの研究授業期間は，４月に学年部を中心に議論した年間カリキュラムの視点を基に，各教科部で実践研究を進めてきた。理科研究部では，３学年の単元「こん虫のかんさつ」で，こん虫の体のつくりや成長について，こん虫の違いによる差異点や共通点を見つけ，それらを基に問いを持ち，観察を通して解決しようとする学習を行った。その際，観察することですぐに分かる体のつくりや住みかの特徴についての知識を，活用できる知識として子供に身に付けさせるために，こん虫を捕まえるための仕掛けを考えて作り，仕掛ける学習過程を展開した。その中で，「木の上にいることが多いから，高い場所におこう」「この虫は，飛ぶよりも足をつかって歩くから，草の茂みに隠そう」などの発言が見られた。また，その際に，昆虫を乱獲するのではなく，大切に思いながらつかまえて欲しいという教師の願いから，同時期に行う道徳「春の女神をまもる」（内容項目：自然愛護）と関連させ，どのような仕掛けなら，生き物や自然を守りながら観察のために捕まえることができるか考える子供の姿も見られた。

---

[1] 文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編』　37 頁
[2] 文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』　137 頁
[3] 同上

2年次の研究

資質・能力※を育成するための，
カリキュラム・マネジメントを行う。

カリキュラム・マネジメントの視点

系統性　発達段階　他教科との関連など

未来を拓く資質・能力（生きる力）

中学校，高等学校，高等教育機関、就職

小学校卒業時までに育成を目指す主な資質・能力（Ｒ６　琉大附属小）		
知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
○個別の知識及び技能を学びながら，既得の知識及び技能と関連づけられ，各教科で取り扱う主要な概念を深く理解し，他の学習や生活の場面でも活用できるような確かな知識及び技能。 ○一人一人が感性などを働かせて様々な事を感じ取りながら考え，自分なりに理解し，表現したり鑑賞したりする喜びにつながる知識及び技能。	○集めた情報を精査し，自分の考えを決めることができる ＜探る力＞ ○複雑な対象に対して視点を明確にしたり，比較・分類したり，概念化することができる ＜決める力・比べる力・分ける力＞ ○目的や対象に応じて，根拠や理由を明確にし，説明したり，感性を働かせたり，表現したりすることができる　＜表現する力＞	○これまでの自分の見方・考え方との違いや学びのつながりから「問い」を見つけようとする ＜問いを見つける力＞ ○学習を振り返り，次の学習へ生かそうとする ＜学びの自覚化＞ ○仲間を認め合い，協力して活動しようとする　＜協働性＞ ○身近な人々や社会及び自然等（ひと・もの・こと）に自主的に関わろうとする ＜社会参画＞

※各教科等の学習過程で発揮させることで，学校全体で育成を目指す（継続検討）

1年次の研究

教科の枠を越えて汎用的に発揮させる資質・能力（子供の姿から立ち上げた整理表）

※ここでいう資質・能力とは，各教科等の資質・能力育成を通して育みたい，卒業時までに育成を目指す主な資質・能力，未来を拓く資質・能力（生きる力）などを指す。